

# 菰野城跡発掘調査報告

1 9 9 8 ・ 9

三重県埋蔵文化財センター

# 序

菰野城跡が所在する菰野の地は、三重県の北部、鈴鹿山脈東麓における交通の要衝であり、古くから重要な位置を占めてきました。この菰野の地より、東西南北方向へそれぞれ街道が延びています。東へは東海道の四日市に向けて菰野道が続き、西へは東海道の近江水口に向けて湯の山道および武平越が続き、南へは東海道の亀山に向けて巡見道が続き、さらに北へは中山道の関ヶ原に向けて巡見道が続いています。現在の国道306号線の路線ルートは、この巡見道に相当します。

近年、菰野の地は、中部圏・名古屋および四日市のベッドタウン化しつつあり、自動車交通量の増加に伴って道路混雑が起きてきております。さらに、近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）およびそのインターチェンジの計画が予定されております。混雑緩和のためにも、将来的な見通しを持った道路整備が県民から要望されております。

今回の菰野城跡の発掘調査も、国道306号線の四日市菰野バイパス建設に伴うものであります。現代社会が便利さを追求する一方で、町民の間で親しまれている地元の城の堀や土塁の一部が、やむなく失われることとなります。せめて記録のかたちでも、このような文化財を残すことは、我々に与えられた最低の責任であると思います。今回の菰野城跡の調査成果を通じて、地元地域および県民の方々にも文化財保護への関心を持って頂ければ、喜びこの上ありません。

なお今回の発掘調査では、三重県県土整備部道路整備課（旧三重県土木部道路建設課）および、三重県北勢県民局四日市建設部（旧四日市土木事務所）、菰野町教育委員会、菰野町立菰野小学校などの関係機関の他、地元の方々から様々な形でご協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成10年9月

三重県埋蔵文化財センター

所長 大井 與生

# 例 言

1. 本書は、三重県三重郡菰野町菰野字藩内に所在する菰野城跡の発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 本調査は、三重県教育委員会が旧三重県土木部（現・三重県県土整備部）より執行委任を受けて、平成9年度国道306号線四日市菰野バイパス国補道路改良事業に伴って実施したものである。
3. 調査は、下記の体制で行った。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

主事 川瀬 聡

技師 杉崎淳子

調査期間 1997（平成10）年1月12日～同年1月26日

4. 調査にあたっては、三重県県土整備部道路整備課（旧三重県土木部道路建設課）・三重県北勢県民局四日市建設部（旧四日市土木事務所）・菰野町教育委員会・菰野町立菰野小学校・（株）院南組および地元各位の方々に御協力を頂いた。
5. 調査ならびに報告書作成にあたっては、下記の方々に御指導・御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）  
  
佐々木一（菰野町郷土資料館）・神田薫（菰野町役場建設課）
6. 本書の執筆、編集は川瀬が担当した。
7. 図版を作成するにあたっては国土調査法による第VI系座標を基準とし、方位の座標は座標北を用いた。真北はN 0° 18′ W、磁北はN 6° 30′ W、それぞれ座標北から振れている。
8. 本書で報告した記録は三重県埋蔵文化財センターで保管している。
9. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

# 本文目次

I 前言	1
II 位置と環境	2
III 遺構	5
IV まとめ	7

# 挿図目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 菰野藩位置図	3
第3図 調査区位置図	4
第4図 土塁および堀測量図	6
第5図 土塁および堀土層断面図	6
第6図 菰野陣屋御殿および家臣屋敷建屋図（複製概念図）	9
第7図 菰野陣屋内家臣屋敷割絵図（複製概念図）	10
第8図 「菰野御屋敷表御殿圖」（複製概念図）	11

# 写真図版目次

写真図版 1 調査前土塁（南北および東西方向部分）	12
調査前堀（南北方向部分）	12
土塁（調査風景、南北方向部分、北西角部分）	12
写真図版 2 土塁（南北方向部分、断面）・堀（東西方向部分）	13
写真図版 3 堀（南北および東西方向部分）	14
写真図版 4 隅櫓跡・菰野城跡の碑	15
移築後の城門・隅櫓・藩邸の書院・馬屋	15

# I 前 言

菰野城跡は、旧伊勢国にあたる三重県の北部、三重郡菰野町菰野字藩内に所在する近世の城館跡である。遺跡範囲は、東西約200m×南北約150mに及び、面積30,000㎡程である。

現状では、遺跡範囲の大部分が、菰野町立菰野小学校の敷地内に当たる。一部分は、小学校の敷地外で、宅地および畑となっている。なお、菰野小学校の敷地はすべて、遺跡範囲に含まれる。

三重県北部の鈴鹿山脈東麓では、国道306号線およびその東方の県道四日市菰野大安線（通称ミルクロード）が、南北方向の主要幹線道となっている。県道四日市菰野大安線は交通量が多く、国道306号線は部分的に道路幅の狭い箇所があり、交通量緩和に向けてその整備が望まれている。

そこで今回、平成9年度国道306号線四日市菰野バイパス国補道路改良事業により、遺跡範囲の北西端にバイパス道路の建設が計画された。

この事業に伴い消滅する部分、面積1,100㎡について、平成10年1月12日から同年1月26日まで発掘調査を実施した。

調査区は、菰野小学校の敷地内ではあるが、その北西隅にあたり、現状は樹林地となっている。そのため、まず樹木の伐開を行い、その後、残存する土塁および堀部分の地形測量を行った。地形測量では1：100の実測図を作成した。

さらに、土塁および堀の南北方向に延びる部分に東西方向のトレンチを設置して、土塁および堀の築造状況を調査した。トレンチの断面図は、1：20の実測図を作成した。

また、調査区内における土塁および堀の遺構面検出を行った。表土は厚さ約10～30cm程であり、表土直下で検出した遺構面も、地形測量した現地形と大きく異なるところはなかったので、再度地形測量は行わずに、写真撮影による記録保存をして、調査を終了した。

## 【調査日誌抄】

- |       |                                       |
|-------|---------------------------------------|
| 1月12日 | 樹木伐開完了。現地調査開始。<br>写真撮影。地形測量開始。        |
| 1月13日 | 地形測量。                                 |
| 1月14日 | 地形測量。                                 |
| 1月16日 | 地形測量完了。                               |
| 1月19日 | トレンチ設定開始。<br>作業員作業開始。                 |
| 1月20日 | 遺構検出開始。トレンチ設定。                        |
| 1月21日 | 遺構検出。トレンチ設定完了。<br>土層断面実測。             |
| 1月22日 | 遺構検出。土層断面実測。<br>寒気入り込み寒くなる。           |
| 1月23日 | 遺構検出完了。写真撮影。<br>土層断面実測完了。<br>作業員作業終了。 |
| 1月24日 | 調査区雪景色となる。                            |
| 1月26日 | 写真撮影。トレンチ埋め戻し。<br>現地調査終了。             |

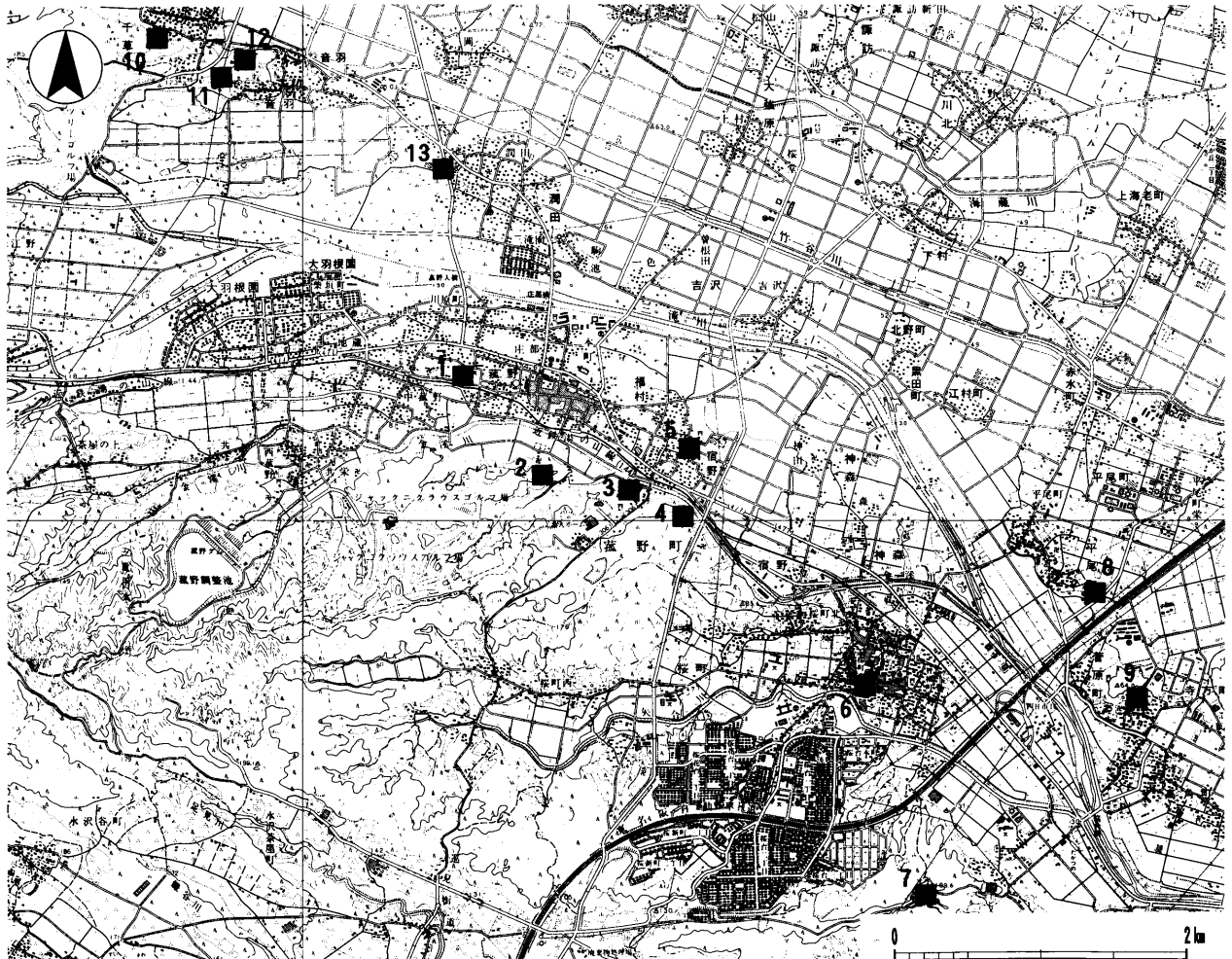
## Ⅱ 位置と環境

菰野城跡（1）は、鈴鹿山脈の東麓、金溪川の北岸に位置する。金溪川は、鈴鹿山脈の雲母峰あたりを源として東流する小河川で、三重郡菰野町と四日市市の境界付近で三滝川に合流する。さらに三滝川は東流を続け伊勢湾へと注ぐ。本城跡は河岸段丘の低位面に立地している<sup>①</sup>。西方には扇状地が広がってきており、本城跡は扇端部から数百m程度しか離れていない<sup>②</sup>。

菰野城築城以前、北伊勢には多くの中世城館が存在していた<sup>③</sup>。三重・朝明・員弁・桑名の四郡は、いわゆる「北勢四十八家」とよばれる諸地侍が領する地域であった。県指定史跡の千草城跡（10）は、四

十八家の統領・千種氏の居城であり、巡見道と千草越の合流点に位置する。千種忠顕の子孫・常陸介の平尾城跡（8）は、平成5年度に一部発掘調査が行われた<sup>④</sup>。その三滝川の対岸に、北畠氏の家臣となった小林丹後守の佐倉城跡（6）、その支城である出城山城跡（7）が分布している。また、菰野城跡より1kmから2km程下流には、土塁と空堀が残る力尾城跡（2）、宿野城跡（4）など、4か所の城館跡が集中している。なお、大久保遺跡（13）では、鎌倉末期から室町期の竪穴状建物などが検出され、日用雑器が出土している<sup>⑤</sup>。

16世紀後半以降は、戦国大名の北伊勢侵攻が続く

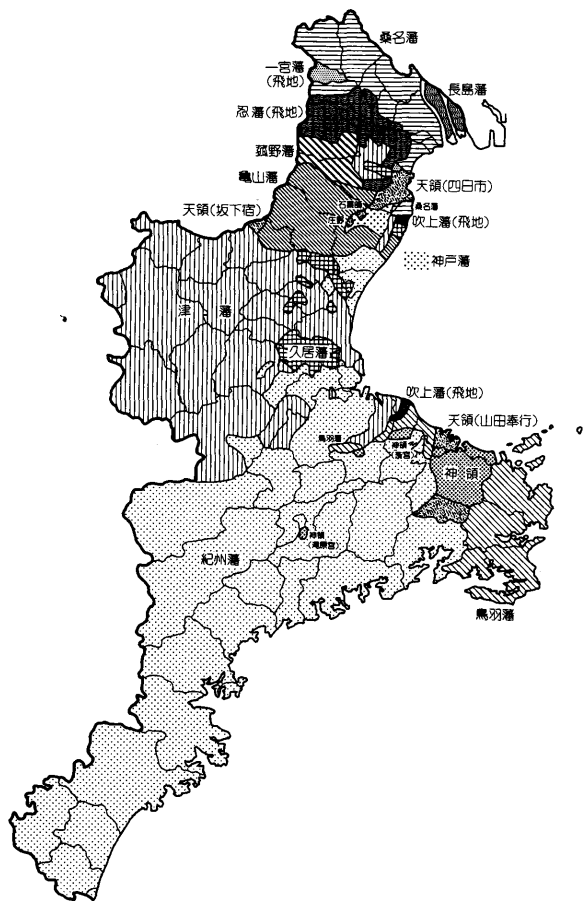


第1図 遺跡位置図（1：50,000）〔国土地理院 1：25,000 菰野 四日市西部 伊船 御在所山から〕  
 1. 菰野城跡 2. 力尾城跡 3. 宿野西城跡 4. 宿野城跡 5. 福村館跡 6. 佐倉城跡  
 7. 出城山城跡 8. 平尾城跡 9. 高角城跡 10. 千草城跡 11. 向城城跡 12. 金ヶ原城跡  
 13. 大久保遺跡

ことになる。弘治年間（1555～1558）、近江佐々木六角氏が千草越から侵入して、千種氏の千草城跡を北伊勢攻略の拠点とした。その後、信長の伊勢侵攻があり、永禄11年（1569）その部将・滝川一益に北伊勢五郡が与えられた。そのうち、三重郡内の代官所は菰野の地に置かれ、代官南川治郎左衛門が統治したといわれる。

さらに、天正10年（1582）の信長の死後、同11年（1583）秀吉の北伊勢制圧があり、滝川一益は北伊勢五郡を差し出し、五郡は織田信雄領となった。同年、織田信雄に仕えていた土方雄久に、菰野城7千石が与えられた<sup>①</sup>。これが、土方氏の菰野領有の始まりである。

ところが、天正12年（1584）小牧・長久手の戦いでの働きに対し、土方雄久には尾張犬山4万5千石が与えられた。なおかつ、天正18年（1590）に秀吉は、旧織田信雄の北伊勢五郡を豊臣秀次に与えた。



第2図 菰野藩位置図  
〔「三重の近世城郭」7ページより縮小転載〕

この頃の土方氏と菰野の地との関係がはっきりしない。

慶長3年（1598）の秀吉の死後、土方氏は、同5年（1600）関ヶ原の戦いに加賀前田利長を家康側につけた功績を認められる。家康から<sup>②</sup>、土方雄久は能登石崎1万5千石を、その子・土方雄氏は伊勢菰野1万2千石を与えられた。土方氏は再び菰野を領有することとなった。これが菰野藩の起りである。

以後、土方氏<sup>③</sup>は外様大名として、明治に至るまで転封なく12代260余年菰野藩主であった。藩主は、初代雄氏、2代雄高<sup>④</sup>、3代雄豊<sup>⑤</sup>、4代豊義、5代雄房、6代雄端、7代雄年<sup>⑥</sup>、8代雄貞、9代義苗<sup>⑦</sup>、10代雄興<sup>⑧</sup>、11代雄嘉、12代雄永と続いた。

さて、菰野城の変遷についても触れてみたい。初代雄氏が慶長6年（1601）に入部した際は、先の滝川一益の代官所跡を補修したにすぎなかった。雄氏は京都の邸に居住しており、菰野の藩庁や居所は、「極て簡粗なるものにして邸門も竹の枝折戸なり」という様相を呈していたらしい<sup>⑨</sup>。

2代雄高は、寛永12年（1635）に家督を継いでから、藩邸の大補修および増築を行った。手を加えたのは、御殿、書院、藩庁、料理部屋、勝手方長屋などである。

3代雄豊は、万治3年（1660）藩邸の全面改築を行い、御殿の門も完備したといわれる。また、城内の東南北三方とも通り抜けになっていたので、延宝2年（1674）に三城戸を設けて番所を置いた。

以上の如く、菰野城は3代雄豊の代までに整備されたようである。しかし、菰野藩主土方氏は、1万2千石の小さな領地しか有することができず<sup>⑩</sup>、無城大名であった。その構えは純然たる城とはいえず、陣屋と呼ばれる居館にすぎなかった。菰野城跡は、江戸時代には菰野陣屋であった。

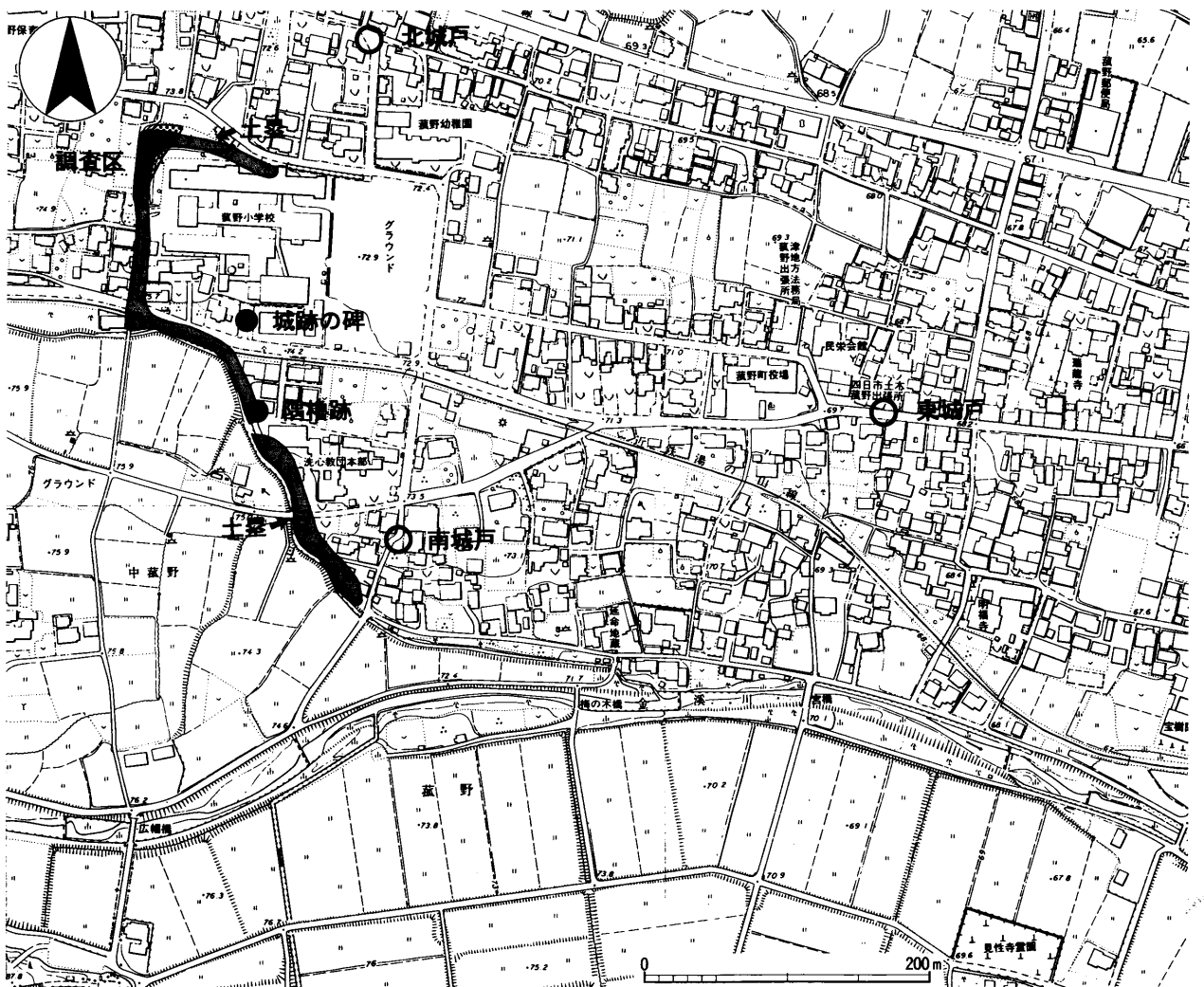
以後、菰野陣屋は、元禄2年（1689）の火災・元禄9年（1696）の火災<sup>⑪</sup>・安政元年（1854）の大地震<sup>⑫</sup>による再改築を繰り返し、幕末維新の変動期に城郭構えの改造を迎えることになる。

【註】

① 国土地理院『1：25,000 土地条件図 桑名』1975  
② なお、鈴鹿山脈東麓では、渓谷からの流水の多くは、扇状地等の地下を伏流水として流れていることが多い。実際に流水の多くは、菰野町東部の沖積平野に入ると、湧水となって地表に現れている。（菰野町教育委員会『菰野町史 上巻』1987）

- ③ 以下、菰野城築城以前の歴史的環境については、次の文献を参考にした。  
三重県教育委員会『三重の中世城郭』1977  
小玉道明・駒田利治・他「三重県」『日本城郭大系 第10巻』新人物往來社1980  
『勢州四家記』（『群書類従 第二十輯 合戦部』所収）  
『勢州軍記』（『統群書類従 第二十一輯上 合戦部』所収）  
『土方家譜』（『大日本史料 第十二編之五』897ページ所収）  
宇佐美祐之「菰野古城沿革記」1900（旧版『菰野町史』菰野町史刊行会1941所収）  
菰野町教育委員会『菰野町史 上巻』1987  
佐々木一「菰野陣屋跡」『三重の近世城郭』三重県教育委員会1984
- ④ 郭内部で掘立柱建物跡と井戸跡が、郭外部では土塁や堀などが検出された。さらに、4つの郭が想定される。土師器皿・羽釜、播鉢、天目茶碗、元豊通寶などが出土している。（四日市市教育委員会『四日市市文化財保護年報5—平成5年度—』1995）
- ⑤ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報13 昭和57年度』1983
- ⑥ 旧版『菰野町史』菰野町史刊行会1941の22～25ページは、「菰野字力尾今ノ見性寺山即皆址ナリ故ニ往時ハ見性寺山ヲ城山ト稱ヘシト云フ」として、この時の菰野城は現在の力尾城跡（2）だとしている。
- ⑦ 「関原聞書」（『新訂増補 国史大系 徳川実紀 第一編』308ページ所収）によると、家康は「土方河内守雄久は（中略）もとよりよく大事を見聞して。国家の用にもたつものなり。（中略）御大量にして且御鑿識の明なるを感じたまつりけり。」と評している。
- ⑧ 「寛政重修諸家譜」巻第三百十二によれば、土方氏は、清和源氏、遠く源頼朝を祖としている。（『新訂 寛政重修諸家譜 第5』356ページ 統群書類従完成会1980）
- ⑨ 2代雄高は、藩士の居住地を定めて屋敷割を行うなど、城下町の整備に努め、菰野藩の基礎を築いた。また、寛永21年（1644）菰野字力尾に、土方家菩提寺として見性寺を創建した。（註9から12は、次の文献を参考にした。旧版『菰野町史』菰野町史刊行会1941、菰野町教育委員会『菰野町史 上巻』1987、西羽見「菰野藩」『三百藩藩主人名事典 第三巻』新人物往來社1987）

- ⑩ 3代雄豊は、明暦3年（1657）に家中諸法度を制定した。また、同年の明暦の大火により、菰野藩江戸屋敷（芝罘右下敷小路の上屋敷）は火災にあっていった。なお、上屋敷跡は発掘調査が行われ、導水管・ゴミ穴・筏地形基礎などが検出され、木製箸・カワラケ・日常雑器類・陶器類などが出土している。（『伊勢菰野藩土方家屋敷跡遺跡発掘調査概要』伊勢菰野藩土方家屋敷跡遺跡調査会1992）
- ⑪ 7代雄年は、老中田沼意次の養女を継々室に迎え、さらに意次の三男を養嗣子（8代雄貞）として迎えた。時の中心人物と縁戚関係を結び、幕府との結び付きを太くしようとしている。
- ⑫ 9代義苗は、臨時準備積立法、領内への御檢約触、藩費半減の極端な緊縮財政を実施し、財政難に苦しむ藩の再興に努めた。また、目安箱を設けたり、産業開発に尽力したり、文教の振興に力を入れたりした。
- ⑬ 菰野町郷土資料館に「土方雄興日記」11冊（文政12年～天保9年=1829～1838）が保管されている。第1冊目の文政12年（1829）を中心に日記の分析がなされている。（上野秀治「土方雄興日記にみる大名嫡子の生活」『三重県史研究 第2号』三重県1986）
- ⑭ 以下、菰野城については、旧版『菰野町史』菰野町史刊行会1941の558～561ページを参考にした。なお、雄氏の死後、雄氏の室・玉雄院（八重姫）は、藩邸内に別館、茶室、庭園付属建物を設けている。
- ⑮ 江戸末期の慶応3年（1867）における現三重県城下の総町村数1609村のうち、菰野藩の町村数は16村で、県域下全体の1.0%を占めるにすぎない。（樋口清砂「近世城郭概観」『三重の近世城郭』三重県教育委員会1984）
- ⑯ 元禄2年（1689）の火災は、小姓部屋より出火し藩邸を焼いた。災後まもなく再建されている。元禄9年（1696）の火災は、炊事室より出火し藩邸を焼いた。同年に再建されている。（旧版『菰野町史』菰野町史刊行会1941の558ページ）
- ⑰ 安政元年（1854）11月4日の遠州灘を震源とする東海道における大地震、および翌日の同年11月5日の土佐沖を震源とする南海道における大地震のち、同年11月7日に、11代雄嘉は、領地震災のため金千兩の恩恵を受けている。その際の領地の様子が、「右領分地震ニ而陣屋向破損。其外山堤崩。潰家等も不少。」と、『統徳川実紀』安政元年十一月四日条にみられる。（『新訂増補国史大系 統徳川実紀 第三編』230ページ）



第3図 調査区位置図（1：5,000）〔土塁の位置は大部分が復元、『三重の近世城郭』による〕



### Ⅲ 遺 構

調査区内における表土の厚さは、約10～30cm程であった。表土直下で検出した土塁および堀の遺構面も、調査前に地形測量した現地形と大きく異なるところはなかった。なお、遺物の出土はなかった。

#### 1. 土塁

小学校の敷地内北西隅にL字状に残存している。L字状に残存している土塁のうち、南北方向に延びる部分の現存全長は約50m、東西方向に延びる部分は同じく約52mである。

北西角の外法は頂上部・基底部ともに直角を意識し、頂上部北西角と基底部北西角を結ぶ外法の稜線は角を二等分する。

この北西角を起点にはほぼ真南へ40mまで、外法の基底部は一直線をなす。同じく東へ36mまで、外法の基底部は一直線をなす。ほぼ同様に、外法の頂上部も内法の頂上部も、一直線をなす。

内法の基底部のうち、南北方向に延びる部分は、アスファルトとなっている学校敷地の整備の際に改変された可能性も考えられるが、いちおう一直線をなす。また、東西方向に延びる部分も、同様に一直線をなすが、内法の勾配がゆるやかで、植林等で築造当時の状況を留めていない可能性が考えられる。

北西角から南および東へ延びる外法の基底部は、一直線をなす箇所を過ぎると、おおよそ135°内側へ、ともに角度を変える。外法の頂上部、内法の基底部および頂上部も、概ね同様である。

土塁および堀の南北方向に延びる部分に設置した東西方向のトレンチの土層から見て、堀の部分の旧地表面と土塁の部分の旧地表面は、高度的には大きなレベル差はなかったようである。また、堀の外法内法の土層と土塁の土層に層序の逆転現象が見られる。このことから、堀の部分の旧地表面を掘り下げて、その退土を土塁の部分の旧地表面に積み上げていったことがわかる。

土塁として積み上げられた盛土は、下位から青灰色砂質土・黒褐色土・黄褐色砂質土の順で、高さ4m弱・頂上部（馬踏）幅約2m・基底部幅9m前後になり、おおよそ台形状の断面をなす。

基底部幅を10として、土塁の構造をおよその比率で表すと、高さは4、頂上部幅は2となる。また、内法は高さ4に5の勾配を、外法は4に3の勾配をなす。内法より外法の方が急である。

なお、上位の黄褐色砂質土層が上面を水平に整えられて盛土されているのに対して、下位の青灰色砂質土層および中位の黒褐色土層は、頂が内側に寄った三角山型に盛土されている。

#### 2. 堀

土塁を取り巻いて同じくL字状に残存する。堀の内法および外法の堀底部・外法の最上部は、土塁と同様に、北西角から南および東へ一直線に延び、一直線の箇所を過ぎると、おおよそ135°内側へ角度を変える。

堀は、深さ4m弱・上幅約8m・下幅（堀底幅）約2.5m弱で、その断面は、下底の短い逆台形である。堀の外法最上点と土塁の馬踏中央を直線で結ぶと、約12mの距離になる。

上幅を10として、堀の構造を比率で表すと、深さは5、下幅は3となる。また、内法は5に3の勾配を、外法は5に4の勾配をなす。ともに急勾配であるが、内法の急さが際立っている。

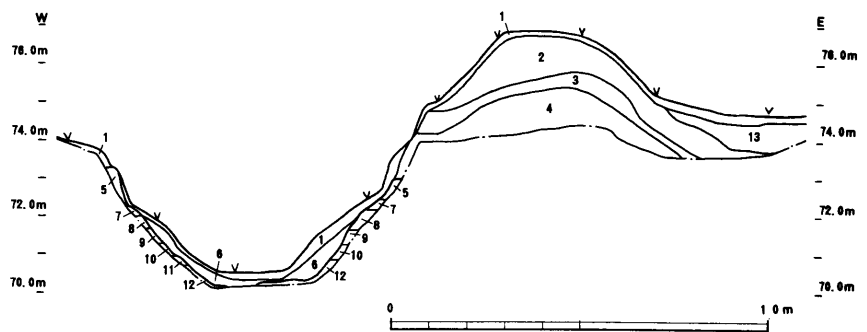
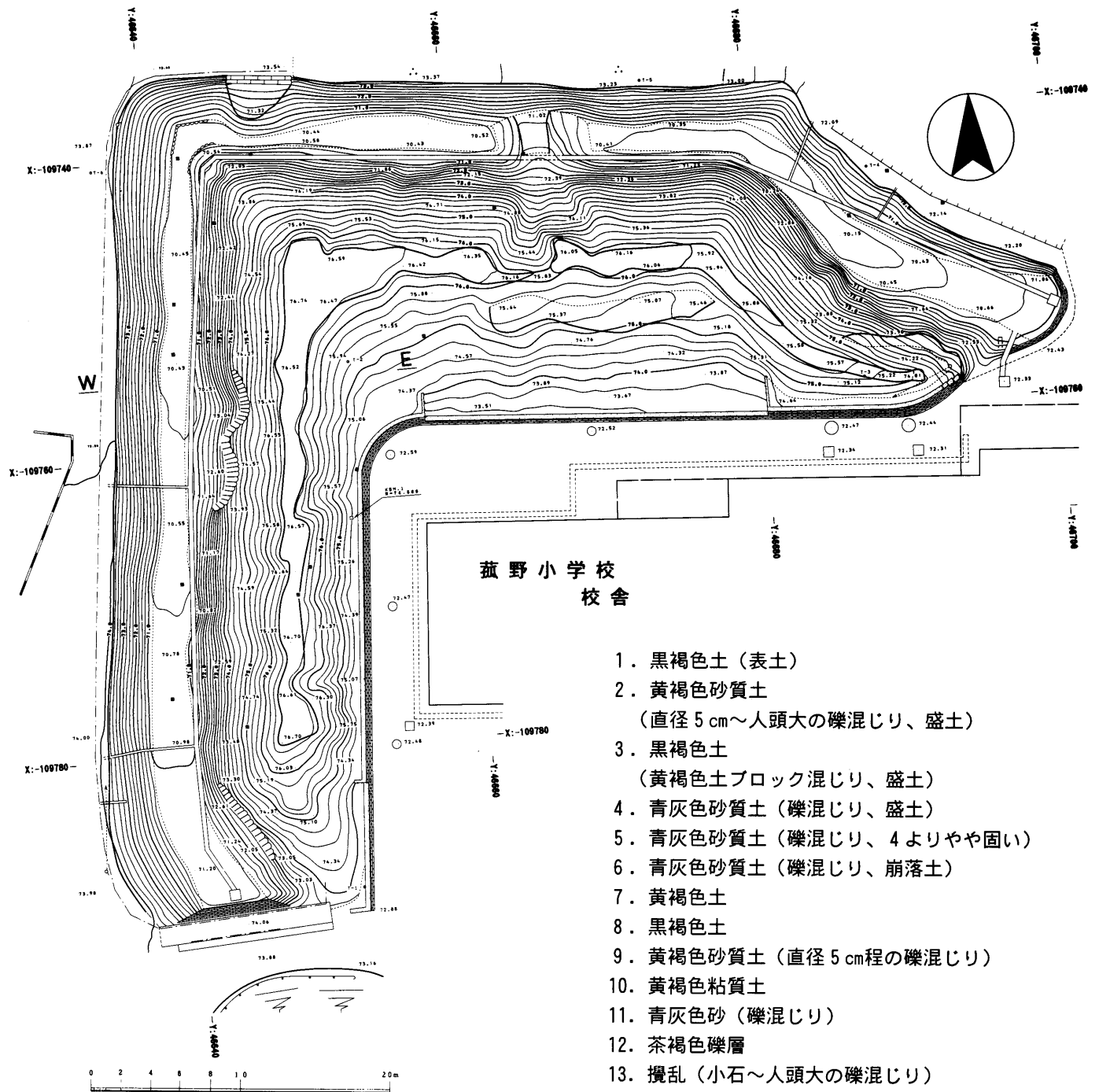
ところで、調査の途中、堀底の堆積表土を除去しながら掘り進める際に、標高約70.5mあたりで湧水が出始めて止まらなくなり、もう少しで堀底であろうと思われる地点で掘削を止めた。

現在は空堀となっているが、昭和三十年代頃までは、水深1.5mほどの水を湛えた濠（水堀）であったという。また、濠（水堀）が現況よりさらに東および南へ延びていたという。そして、濠（水堀）が水田の灌漑用水の役目を果たしたり、その東端部分がプールとして使用されたりしていたようである<sup>①</sup>。

菰野城跡の堀は、地下の伏流水による湧水を利用した濠（水堀）として機能していたと思われる<sup>②</sup>。

#### 【註】

- ① 菰野町郷土資料館・佐々木一氏の御教示による。
- ② 前掲3ページの註②参照。



第4図 土塁および堀測量図（1：400）、第5図 土塁および堀土層断面図（1：200）

## N ま と め

最後に、以下の2つの観点から菰野城跡に関わる資料を提示し、まとめにかえたい。

### 1. 幕末以降の菰野城（菰野陣屋）と藩情勢

元治元年（1864）7月蛤御門の変、同年8月第一次長州征伐、2年後の慶応2年（1866）第二次長州征伐、このとき隣藩の桑名藩は京都所司代を勤め、幕府側の主力であった。

慶応3年（1867）10月大政奉還、同年12月王政復古の号令、翌慶応4年（1868）1月鳥羽伏見の戦いで、桑名藩を含む幕府側は敗北する。同年2月、新政府より菰野藩12代藩主土方雄永に、伊勢国内における旧幕府領の支配、および東征軍の東海道通過に当たっての警備、という申し渡しがあった<sup>①</sup>。

また同年3月五か条の御誓文、同年9月年号を明治と改元、そして同年11月に濠と土塁が築かれている。濠は、東西92間、南北73間、幅4間であった<sup>②</sup>。

また、翌明治2年（1869）3月には、濠と振子川が出会う陣屋の西南に、隅櫓が築かれている<sup>③</sup>。古写真<sup>④</sup>および移築後の遺構<sup>⑤</sup>からすれば、隅櫓は、白亜の二重櫓で、上重が入母屋屋根になっているが、装飾的な破風を全く用いていない。隅巴瓦には、三頭左巴の土方家家紋が見られる。なお現在も、櫓台の石垣が残存している。

このように、幕末維新の変動期に、菰野藩主の居館は、菰野陣屋というべき構えから、菰野城というべき構えに、改造されている。

外様の小藩がこの改造に踏み切ったのは、幕末維新動乱の緊迫した情勢を敏感に察し、自藩の警衛の必要性を強く認識したからであろう。鉄砲隊の組織および操練場の設営<sup>⑥</sup>、足軽銃隊の組織および練兵場の設営<sup>⑦</sup>、菰野藩士高槻肇が幕府の鉄砲方になったこと<sup>⑧</sup>、京都警衛に藩士を送っていたこと<sup>⑨</sup>、幕府側の主力であった隣藩桑名藩の動き、いろいろな要素・背景から、情勢に対して敏感であったことが伺える。

また、文化8年（1811）ごろの巨額な藩債はすべて返却され、慶応2年（1866）には健全な財政に立ち直っていたことが、この居館改造にとっては好都合であった<sup>⑩</sup>。

合であった<sup>⑩</sup>。

なお、濠と土塁および隅櫓が築かれたのは、12代藩主土方雄永のときである。明治2年（1869）に雄永は、竹屋光有の娘・益子姫を正室として迎えている。竹屋家は、京都の公家である。竹屋家から「堀もないような城主に娘をやれない。」と言われ、あわてて堀を掘ったという逸話が残っている<sup>⑪</sup>。

隅櫓完成から3か月後、明治2年（1869）6月に版籍奉還が実施され、菰野藩12代藩主土方雄永は菰野藩知事に任命された。

明治4年（1871）7月の廃藩置県により、菰野藩は菰野県に、菰野城は菰野県庁となった。続いて同年11月には安濃津県に合併された。

さらに、明治6年（1873）の廃城令により、菰野城も、表門・藩邸・馬屋・土蔵・隅櫓など、城内の建築物は取り壊されて、廃城となった<sup>⑫</sup>。その際に他所へ移築された建造物のうち、藩邸の書院・隅櫓・馬屋・城門は、改築の手が加わってはいるが現存している<sup>⑬</sup>。

そして、明治9年（1876）城跡地は旧藩士に払い下げられ耕地となった。その後、明治31年（1898）に、菰野尋常小学校が城跡地へ移転され、現在にまで至っている<sup>⑭</sup>。

### 2. 絵図類に見える菰野城（菰野陣屋）

なお、ここで主に取り上げる絵図類は、菰野町郷土資料館所蔵の複写図による<sup>⑮</sup>。

最古と思われる絵図は、享保年間（1716～1735）の菰野陣屋御殿および家臣屋敷の建屋図（第6図）である<sup>⑯</sup>。菰野陣屋関係の屋敷として、「御屋敷」、「御土蔵屋敷」、「御馬場屋敷」、「□□屋敷」が見られる。この「□□屋敷」は「西御屋敷」と思われる<sup>⑰</sup>。なお、今回の調査区は、当時の絵図からすると、竹林であったと思われる<sup>⑱</sup>。

また「御屋敷」内に、「御書院」、「表御門」、「御臺所」、「下臺所」、「御長屋」、「御庭」、「井戸」等の建物などが、「御土蔵屋敷」内には、「御土蔵」、「御米蔵」、「西御蔵」、「竹蔵」、「御壘蔵」、「イナ

り、「大工小家」が見られ、陣屋としての構えを呈している。

さらに、陣屋の「御屋敷」の東南北方には、それぞれ「御番所」が設けられている。仮に南方の「御番所」から進入したとすると、右折・左折・左折・右折して「表御門」を潜り「御屋敷」内に至る。

また、同じ享保年間（1716～1735）の絵図としては、「菰野候御殿図」があり、御屋敷の建物配置が分かる<sup>⑨</sup>。

次に古いと思われる絵図は、嘉永5年（1852）の菰野陣屋内の家臣屋敷割絵図（第7図）である<sup>⑩</sup>。菰野陣屋地の範囲が示され、その範囲内に「御馬場屋敷」、「表御門」、「北御屋敷」、「西御屋敷」、「御土蔵屋敷」という記載がある。しかし、建物の詳らかな位置や規模などは不明である。

次に、文久2年（1862）の絵図がある<sup>⑪</sup>。菰野陣屋の「西裏御門」と「表御門」が絵で表されている。陣屋内に「御殿」、「長屋」、「御馬場」という記載が見えるが、建物の規模など詳細は定かでない。

最後に、隅櫓が描かれている絵図類がある。これは、土塁と濠および隅櫓が築かれた後に描かれたもので、明治2年（1869）以降の資料と思われる。

その内「菰野御屋敷表御殿圖」（第8図<sup>⑫</sup>）には、「御櫓」も見え、御屋敷内の建物配置がわかる。この図と享保年間（1716～1735）の「菰野候御殿図」を比較すると、建物部屋配置に異なる部分が多々ある。これは、安政元年（1854）の大震災による建て替えが行われた可能性を示唆するものと思われる<sup>⑬</sup>。

他にも、菰野城下の「御畷面圖<sup>⑭</sup>」があり、「御ヤグラ」や「御濠」という記載が見られる。

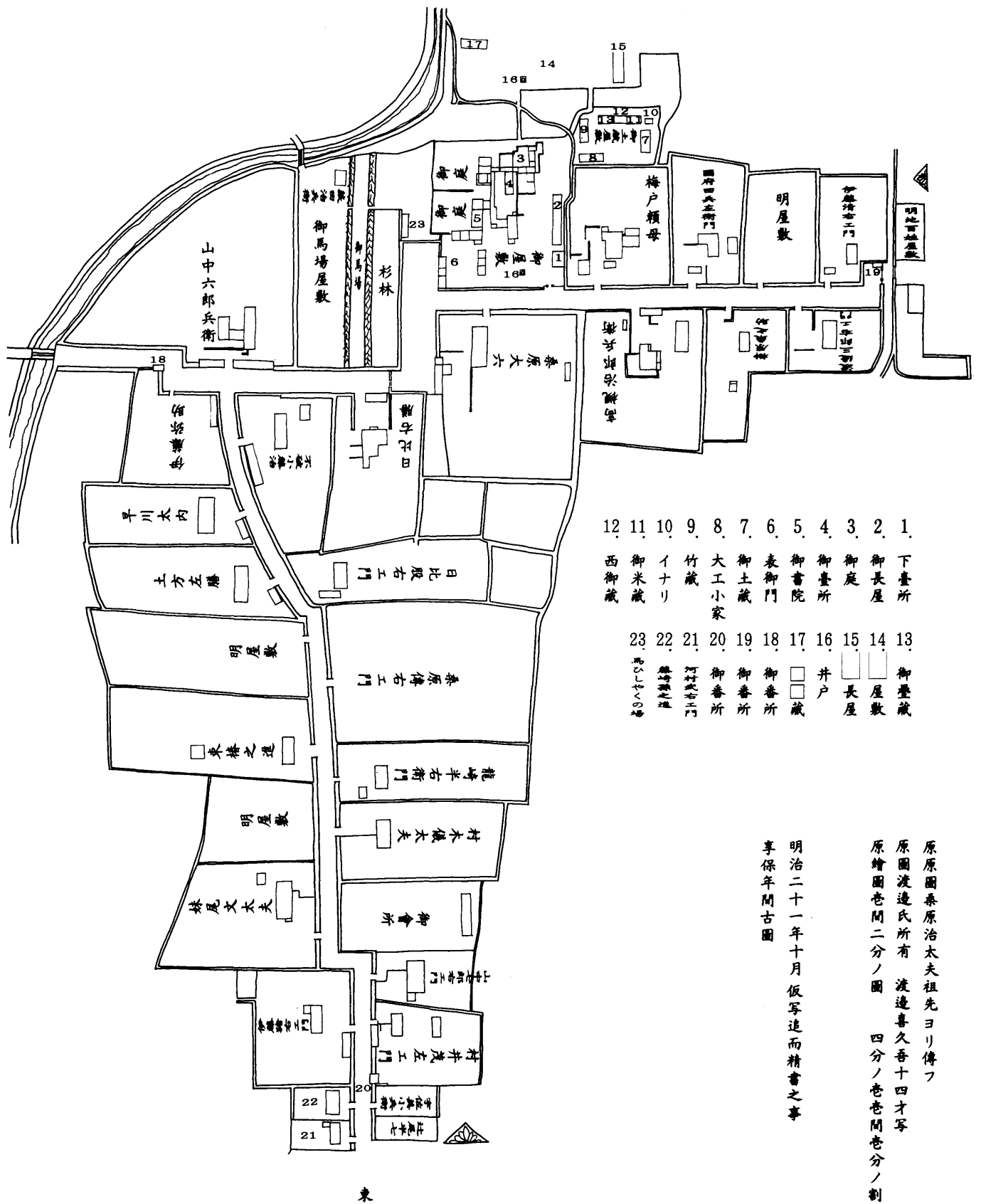
以上のように、多くの絵図類が所蔵されている。

土塁および堀の築造状況を部分的に確認できたことが、今回の調査成果である。研究資料の蓄積に多少の追加資料を加えることはできたが、その築造年代を明確にできるような結果は得られなかった。菰野城跡の歴史を解明するため、文書絵図類などの研究とともに、今後の調査の進展に期待したい。

#### 【註】

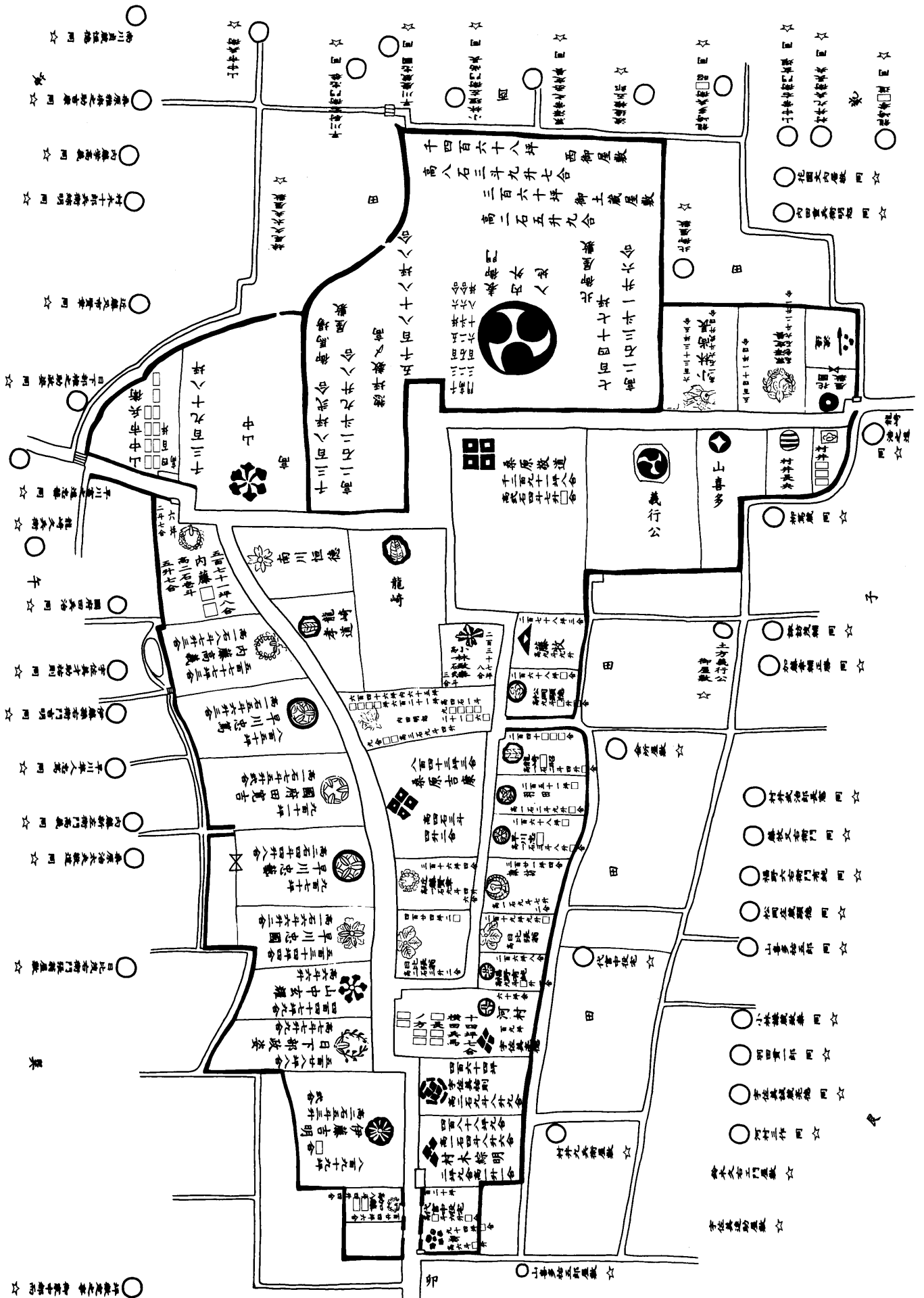
- ① 菰野町教育委員会『菰野町史 上巻』1987の631ページ
- ② 旧版『菰野町史』菰野町史刊行会1941の679ページ、佐々木一「菰野陣屋跡」『三重の近世城郭』三重県教育委員会1984
- ③ 註②に同じ。
- ④ 隅櫓の古写真は、明治4年（1871）頃に撮影されたようで、次の刊行物に掲載されている。  
福井健二「菰野陣屋」『三重の城』三重県良書出版会1979  
福井健二「菰野陣屋」『日本城郭大系 第10巻』新人物往来社1980  
西ヶ谷恭弘『日本城郭古写真集成』小学館1983  
藤林明芳「伊勢菰野陣屋（二）」『城と陣屋シリーズ172号』日本古城友の会1986  
相山満（監修）『目で見える四日市の100年』名古屋郷土出版社1990  
西ヶ谷恭弘『城郭古写真資料集成—西国編—』理工学社1995  
また、同じ頃の古写真が、他にも2種類ある。1つは、表御門を斜め横から撮影したもので、その右に長屋が続いている。表御門は、長屋状建物の一部を開いて門扉とした長屋門である。なお、この写真には、同じアングルでありながら、表御門の門扉を開いた写真と、門扉を閉じた写真とがある。もう1つは、表御門から続いている長屋を斜め横から撮影したものである。これらの古写真は、上記の他、次の刊行物にも掲載されている。  
旧版『菰野町史』菰野町史刊行会1941  
『日本城郭全集 別巻 写真・資料集』人物往来社1968  
藤林彰「城と陣屋シリーズ72号 伊勢菰野陣屋」日本古城友の会1973  
菰野町教育委員会『菰野町史 上巻』1987  
佐々木一「土方氏の本拠地・菰野城と城下町」『図説・北勢の歴史 上巻』郷土出版社 1992
- ⑤ 隅櫓は、明治6年（1873）に移築され、改築の手が加わっているが、現在個人宅の土蔵倉庫として利用されている。
- ⑥ 嘉永6年（1853）に鉄砲隊を組織して、陣屋の北、川原町如來寺裏の川原に操練場を設けている。（菰野町教育委員会『菰野町史 上巻』1987の625ページ）
- ⑦ 元治元年（1864）陣屋の北東、庄部に清水練兵場を設け、足軽で銃隊をつくり、洋式の訓練を行った。（註⑥の文献に同じ）
- ⑧ 安政2年（1855）江川坦庵の死後、外国から購入する鉄砲の検査および試射の指導に当たった。（註⑥の文献に同じ）
- ⑨ 註⑥の文献630ページ参照。
- ⑩ 註⑥の文献619～624ページ参照。
- ⑪ 菰野町教育委員会『菰野町史 下巻』1997の300ページ、佐々木一「お姫様とお堀」『菰野百夜話—こものがたり ころものふるさと ころも—』三重県菰野町1979

- ⑫ 佐々木一「菰野陣屋跡」『三重の近世城郭』三重県教育委員会1984
- ⑬ 藩邸の書院は、菰野町下村の禅林寺に移築され、本堂となっている。馬屋は、個人宅に移築され納屋倉庫として利用されている。鬼瓦に土方家の家紋が見られる。城門は、菰野町小島の金蔵寺に移築され、山門となっている。（佐々木一「菰野陣屋跡」『三重の近世城郭』三重県教育委員会1984、藤林明芳「伊勢菰野陣屋（二）」『城と陣屋シリーズ172号』日本古城友の会1986）
- ⑭ 『復元大系日本の城4 東海』ぎょうせい1992の173ページ
- ⑮ 原図は実見していないが、菰野町郷土資料館所蔵の複写図を実見させていただき、さらに、それをトレースさせていただいた。ただし、文字の形・大きさ・位置などは、原図のとおりではない。9～11ページに掲載した図が、それである。なお、佐々木一「菰野陣屋跡」『三重の近世城郭』三重県教育委員会1984の15ページに、7つの絵図の存在が示されている。そのうちの「菰野城邸内御殿建屋図付郭内家臣居住建屋図」が本書の第6図に、「城内屋敷絵図 元禄15年より嘉永5年まで家中屋敷改め」が第7図に相当する。
- ⑯ 絵図の端が一部複写されていない。明治21年（1888）10月の写しである。なお、福井健二「三重の近世城郭絵図集」日本古城友の会1977の16ページ「菰野絵図」、および福井健二「菰野陣屋」『三重の城』三重県良書出版会1979の36ページ「菰野絵図」も、これと同じものと思われる。
- ⑰ 註⑬の文献の「菰野絵図」による。
- ⑱ 註⑬の文献の「菰野絵図」とこの絵図を合わせて見ると、今回の調査区は当時竹林であったと思われる。
- ⑲ 『定本・三重の城』郷土出版社1991の4ページ掲載写真
- ⑳ 菰野町教育委員会『菰野町史 上巻』1987の802ページに、この絵図に記載されている屋敷ごとの説明書が抄出している。
- ㉑ 佐々木一「菰野道」『美濃街道・濃州道・八風道・菰野道・巡見道・巡礼道・鈴鹿の峠道—歴史の道調査報告書—』三重県教育委員会1984の45ページに、「菰野大輪圖」が複写されている。また、文久2年（1862）の絵図には、もう1種類、別の図が存在するようである。前者には見られない箇所まで描かれた複製図で、次の文献に掲載されている。  
福井健二「三重の近世城郭絵図集」日本古城友の会1977  
福井健二「菰野陣屋」『三重の城』三重県良書出版会1979  
福井健二「菰野陣屋」『日本城郭大系 第10巻』新人物往来社1980  
藤林明芳「伊勢菰野陣屋（二）」『城と陣屋シリーズ172号』日本古城友の会1986
- ㉒ この絵図は、次の文献にも掲載されている。  
福井健二「三重の近世城郭絵図集」日本古城友の会1977  
福井健二「菰野陣屋」『三重の城』三重県良書出版会1979
- ㉓ 前掲4ページの註17参照。
- ㉔ 『定本・三重の城』郷土出版社1991の4ページ掲載写真参照。隅櫓の絵が描かれており、二重櫓であることがわかる。



原原圖森原治太夫祖先ヨリ傳フ  
 原圖渡邊氏所有 渡邊喜久吾十四才写  
 原繪圖卷間二分ノ圖 四分ノ卷間卷分ノ割  
 明治二十一年十月仮写迄而精書之事  
 享保年間古圖

第6図 菰野陣屋御殿および家臣屋敷建屋図(複製概念図)  
 [原図を25%縮小、享保年間(1716~1735)、原図は数字番号でなく建物等の名称が直接記されている]



第7図 菰野陣屋内家臣屋敷割絵図(複製概念図)

〔原図を50%縮小、嘉永5年(1852)、☆は以下の説明書を省略した(8ページ註②参照)〕

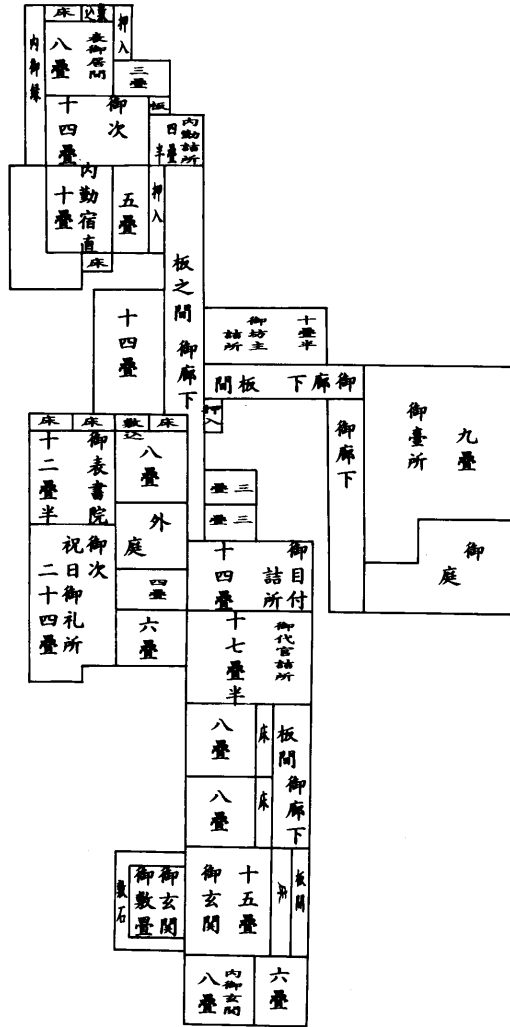
二月半  
御物置  
御櫓  
半間二

御物置  
二月  
半間四

藏土御  
二月半  
間五

二月半  
御土藏  
六間半

菰野御屋敷表御殿圖



御物置  
五月  
間十

門御表  
御物見  
二月

屋部馬御  
屋長御  
二月半  
裏御門  
間八十二丈

第 8 図 「菰野御屋敷表御殿圖」(複製概念図)  
〔原図を40%縮小、明治2年(1869)以降〕



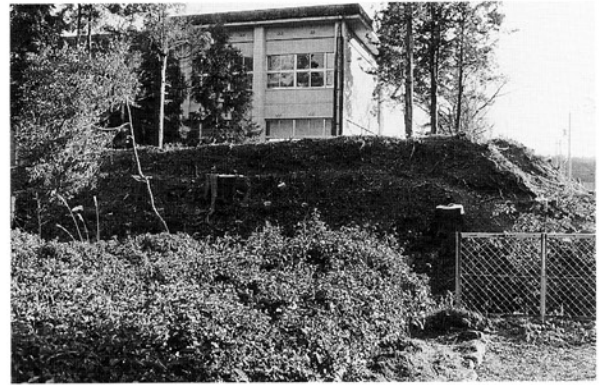
調査前 土塁（南北方向部分・北から）



調査前 土塁（南北方向部分・北西から）



調査前 堀（南北方向部分・北から）



調査前 土塁（東西方向部分・北から）



土塁 調査風景（南から）



土塁（北西角部分・北西から）



土塁（南北方向部分・南から）



写真図版 2



土塁（南北方向部分・北から）



土塁 土層断面（南西から）



土塁および堀（南北方向部分・南から）



堀および土塁（南北方向部分・南から）



堀（東西方向部分・西から）



堀（南北方向部分・北から）



堀（東西方向部分・東から）



写真図版 4



隅槽跡 (平成10年撮影)



隅槽台の石垣 (平成10年撮影)



菰野城跡の碑



移築後の城門 (平成10年撮影)



移築後の隅槽 (平成10年撮影)



移築後の隅槽の隅巴瓦 (平成10年撮影)



移築後の藩邸の書院 (平成10年撮影)



移築後の馬屋 (平成10年撮影)

# 報告書抄録

ふりがな	こものじょうあと はくつちようさほうこく							
書名	菰野城跡 発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	172							
編著者名	川瀬 聡							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 0596-52-7031							
発行年月日	西暦 1998年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こものじょうあと 菰野城跡	みえけんみえぐん 三重県三重郡 こものちようこもの 菰野町菰野 あざはんない 字藩内	24341	53	35° 00' 34"	136° 30' 40"	19980112～ 19980126	1,100	平成9年度国 道306号線四 日市菰野バイ パス国補道路 改良事業に伴 う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
菰野城跡	城館跡	近世 (江戸～ 明治時代)	土塁 堀					

平成 10(1998) 年 9 月に刊行されたものをもとに  
平成 19(2007) 年 8 月にデジタル化しました。

---

三重県埋蔵文化財調査報告 172

## 菰野城跡発掘調査報告

1998年9月

編集 三重県埋蔵文化財センター  
発行

印刷 光出版印刷株式会社

---